

長崎史談会・平成26年度秋季研修旅行
京都方面史跡めぐり(9月2日～4日)No.3

本会名誉会長 宮川雅一

三一、上御茶屋向かって進む両側に黄金(こがね)の 稲田刈入れを待つ

前述の通り境内に取り込まれた稲田が歩いてゆく松並木の園路の両側に広がっており、稲穂が一斉にお辞儀をしている。

三二、上御茶屋「隣雲亭」から眺むれば北山洛中西 山麓(おぼろ)

高所の「隣雲亭」から眺めると、雨の中京都の市街とそれを取り巻く山々が見渡せる。雨が小降りとなったので、急な坂を下りて浴龍池のほとりに入る。

三三、中の島「窮途亭」の窓際に直角を成す上段 の間あり

楓橋を渡って三保ヶ島に行き、「窮途亭」を拝観。窓に沿って鍵形の上段の間があり、いかにも池の景色を眺めるのに適した造り。隣の万松塙を一巡りしてから島を離れる。

三四、三段の緑なす堰(せき)築きあげ舟遊びせんと 井戸水を貯む

浴龍池というのは人工のため池で、ここで舟遊びを行うため、池畔の各所に石の船着場が設けられている。最近水量を補うため井戸が掘られ、灌漑用にも使われている。1時間を越えた参観を終え、待合室に戻る。

三五、修学院離宮観山富士の嶺(ね)の型なすところ 選びて建つる

見送りに来たガイドから、比叡山がここから見ると富士の姿をしているので、上皇が離宮の場所を選んだ。帰りに振り返るとそれが分かると教えられた。

三六、両離宮御所を挟んで東北と西南に別れ山地 と平地

今日訪ねる両離宮は、京都御所から見て一方が東北の山地に対して、他方は西南の桂川沿いの平地とまことに対照的である。タクシーの移動に1時間以上かかった。

三七、桂川渡ればすぐに離宮あり菓子売る店で ソーメンを食う

桂大橋を渡ると目的地の駐車場に到着。創業明治16年の老舗・中村軒という菓子店の座敷で後続組と一緒に食卓を囲む。鰻定食は敬遠、ソーメンに赤飯が付いた定食を注文。

三八、珍しき笹垣続く川縁(かわべり)の緑林の中 入口を探す

桂川沿いを歩いて離宮の入口へ。離宮を囲む生垣が独特な笹垣で、穂垣と共に熟練した技術で5年に1度作り変えるという。桂離宮は御陽成天皇の弟君で文人の智仁親王とその嗣子智忠親王が造営した八条宮家の別荘。同時代に出来た日光東照宮の豪華絢爛美と対照的な精神的機能美を追求。雨が本降りになり、滑って転ばないかと足元が気になってずっと下ばかり見て歩く。庭園の立派な踏石・敷石に見とれて肝心の庭園や建物を見損うことが多かった。

三九、表門その奥にある御幸門普通使うは黒御門 (ごもん)という

表門はもとの御成門で、2本の太い丸木の門柱間に磨き竹で出来た門扉を取り付けただけの簡素なもの。左右にやはり磨き竹の袖塙と穂垣が連なる。御幸門も簡素な造り。

四〇、苑道に茅葺屋根の外腰掛茶席の客の待つと ころなり

苑路で最初に会おうのが外腰掛。形式だけの砂の雪隠があった。

四一、一本の切石渡れば「松琴亭」青と白との市松 模様

細長い切石1本でできた危なっかしい橋を渡る。智忠親王の奥方が加賀前田家出身ということで、よく目立つ市松模様の襖が最近石川県産和紙で張り替えられたとのこと。

四二、苑内で最も高みは「賞花亭」連子窓(れんじま ど)ある消夏の亭(ちん)

峠の茶屋を思わせる、「賞花」が「消夏」に通じる涼しげな場所。近くにあった水蛭燈籠など桂離宮にはあちこちに背の低い燈籠があり、それを探すのも楽しみのひとつという。

四三、「園林堂」宝形造りの持仏堂異質なれども 景観のひとつ

宝形造りで本瓦葺きの「園林堂」は、当初、初代智仁親王とその師細川幽斎の尊像を納め、その後は八条宮家代々の位牌と尊像が安置されていた持仏堂。今は建物だけ。

四四、丸き窓四角の窓のそれぞれに笑みを覚える 「笑意軒」かな

「笑意軒」からは舟溜まりの岸へ2つの石段で降りてゆける。4つの丸い窓や四角い窓は竹の骨の編み方で趣向を凝らし、入口には船着場を意識してか御朱印船の絵馬があった。

四五、苑内の中核をなす各書院眺望のため雁行し て建つ

この中心は古書院、中書院、楽器の間、新書院が連なる書院群。眺望を考えて雁行型に立ち並ぶ。屋根の曲線が美しい。参観を終えるや時間を気にしてタクシーに飛び乗り、ホテルに戻り、そのまま荷物を持ってバスに乗り込む。予定通りANA 169便で帰崎。(終)



三番・四番目の句にある福知山城にて